

秋田大学医学部附属病院の総合防災訓練を相互訪問により評価しました (2015/10/25)

テーマ：大学病院の防災訓練評価のための相互訪問事業
会場：秋田大学医学部附属病院（秋田市）

2015 年 10 月 26 日(月)に、国立大学付属病院災害対策相互訪問事業の一環として、秋田大学医学部附属病院を訪問しました。エビデンスに基づいたヒアリング、この事業は国立大学附属病院全体での災害対応能力の底上げを行い、標準化をはかること、災害対策意識の向上、情報の蓄積および共有をはかって災害発生時の継続的な医療提供を可能にすることを目的としています。東北北海道ブロックのなかで相互に訪問しあうことによって、3 年の間に必ずすべての国立大学附属病院が受け入れと訪問の両方を経験することになっています。

評価はあらかじめ送ってもらったエビデンス（災害対策マニュアルや災害対策委員会議事録、消防計画書、アクションカードなど）に基づくヒアリング、防災関連施設（ヘリポート、備蓄倉庫など）の見学、防災訓練の見学などを通して行います。災害対策確認表が統一された評価項目として事前の自己評価と関係するエビデンス、対応者、訪問大学確認、コメントが記載されるようになっており、A. 組織、B. マニュアル、C. 訓練、D. 医療提供体制、E. 応援体制について効率的かつ客観的に評価できるようになっています。

ヒアリングでは病院長、副病院長、DMAT 隊長、看護部長、事務部長など病院の執行部が先頭にたって参加されており、相互評価を受け入れることによって病院全体として防災訓練に取り組むことができたことがわかりました。また、再開発が終わったばかりの新しい建物のなかでも、融雪施設を備えたヘリポートと、備蓄倉庫が一体となって救命救急センターにも近いところに建てられており、機能的でした。防砂訓練は 14 時から 16 時までの 2 時間で行われ、地震と津波を想定した訓練が始まると、病棟のスタッフは一斉に机のしたに潜って身の安全が確保できたのちに、すばやくアクションカードを取り出して首からぶら下げ、ヘルメットをかぶって入院患者さんの安否を確認していました。災害対策本部もすぐに設置され、被災情報の集約が開始されました。トリアージエリアでは、学生 50 名のボランティアが模擬患者となって、多数傷病者受け入れ訓練がなされました。看護師 2 名と事務職員 1 名が 3 人 1 組となってトリアージと ID 付与を行っているのが効率的でした。緑・黄色・赤のエリアも短い導線と効率的な外来診療室の使用によって運用されていました。それぞれのエリアに必要な物品を入れた袋と、資材を入れたボックスが準備されており、SPD によってメンテナンスされているとのことでした。黒エリアでは秋田県警との協力により検視訓練も行われていました。

災害対策本部では、まとめの災害対策会議をもって訓練終了となり、講評と反省会が行われて全部署からの代表者に伝えられました。相互評価はさらに別室に移って、訓練を通して得られた災害対応の良い点、改善すべき点などについて行われました。実際の災害では予想もしなかったことが起きますが、想定外をなるべく少なくする努力によって災害対応能力が向上し、地域医療の継続という大学病院の使命を果たすことができます。相互訪問という仕組みは効果的に働いています。



好天のもと秋田大学医学部附属病院で行われた防災訓練



屋上にヘリポートをもつ防災倉庫
救命救急センターからすぐに立地している



発災と同時に身の安全を確保し、アクションカードを胸にぶらさげ安否確認する病棟スタッフ



防災服に着替えて対策本部の指揮をとる病院長（左から3人目）と、情報を集約する本部要員



看護師2名と事務職員1名が1組になって
学生が扮する模擬患者のトリアージを行う。



トリアージポストの統括をする秋田大学 DMAT



ホワイトボードに時事刻々と変化する赤エリアの入院患者状況をまとめる事務スタッフ



黄色エリアとして使用され超音波検査室ではポータブルX線装置でレントゲンがすぐに撮影できる

薬品	規格	数量	単位
ロブ錠	60mg/錠	100	錠
エリーテン錠	5mg/錠	100	錠
デブレンカプセル	50mg/Cap	100	カプセル
セフカベンピボキシル錠	100mg/錠	100	錠
モーラステープ(7枚/袋)	20mg/枚	10	袋

緑エリアで頻繁に用いられる薬剤を緑の袋で薬剤部が管理しすぐに出せる



シミュレーション用人形を用いた警察と合同の検視訓練

文責：江川新一（災害医学研究部門）